

参拝の栞



神光院の由緒

当寺は真言宗弘法大師の霊場で、東寺、仁和寺と共に京都三弘法の一つとして有名である。

往古瓦屋寺と呼ばれ、御所に奉納する瓦製作の職人の宿所に使用されていたと云う。

弘法大師(空海)四十二才の夏の寺で九十日間修行せられ、この地を去るにあたって、庶民との離別を悲しみ、境内の池に自らの姿をうつして自像を刻み、

「爾今、我れを信する者は老若男女の別なく諸病災厄を除くであらう。」

と誓願された。現在本堂安置の本尊はこの像であると伝えられている。その後、建保五年(一一二七年)上賀茂神社社務職、松下能久が加茂明神の霊夢により、大和三輪の慶円上人を請じて境内に一字を建立し、放光山神光院と称し、現在に至っている。

本堂

もと上賀茂神社の境内にあった一字を天保元年、この地に再建し本堂とした。堂内安置の仏像に、弘法大師像の他、薬師如来立像(鎌倉時代)愛染明王坐像(室町時代)不動明王(鎌倉時代)十一面観音立像(年代不詳)等がある。

蓮月庵

山門に入った左側の茶所である。明治の女流歌人大田垣蓮月尼が、慶応二年七十六才の秋から明治八年八十五才の臨終までの十年間、この茶所に隠棲した。この草庵は約十二坪で、此の中の一間は、蓮月尼が、この庵に入る時に移したもので天井はす、竹の素朴なものである。

尼の辞世に　ねがはくばのちの蓮の花のうへに

くもらぬ月をみるよしもがな



(境内)

京都市北区西賀茂神光院町120

京都三弘法 厄除 神光院

TEL491-4375

蓮月尼概説

蓮月尼は寛政三年(一七九二年)京都鴨川の西涯三本木(現河原町丸太町東入ル)で生れ、生後間もなく大田垣家に養女として引取られ幼名を誠子と云った。父は伊賀上野城主、藤堂金七郎と伝えられ生母は不明である。

養父は大田垣光古といひ因幡の人、東山知恩院へ勤仕した。誠子十一才の時亀岡城主に奥仕えし、十七才の時奉公を終つて養父の許に帰り、文化五年十九才の春、養父の知人である城崎郡山本村の岡天造を婿養子として迎へ名も望古とあらためた。望古との間に一男二女があつたが幼くして死亡し、夫望古も放蕩者で父とも折合悪しく誠子二十五才の時離縁された。

しかし文政二年誠子二十九才の春、彦根藩士である石川重二郎を再び婿養子として迎へ名も古肥とあらためた。



(蓮月尼作 急須)

古肥は温良恭謙な人で父にもよく仕え妻にも愛情深く、日々父と共に知恩院に勤仕し、二人の間には一男一女も生れ、この期間が蓮月尼の在俗中最も幸福な歳月であつたと思はれる。文政六年六月、古肥は不幸にして労咳で死亡、誠子三十三才の時であつた。

此の年難髪して蓮月尼とあらため、父も西心と号し知恩院内の真葛庵に住つた。真葛庵に住ふ事十余年にして古肥との間に出来た二児も夭折し、父西心も天保三年七十八才で没している。時に蓮月四十才であつた。

この様に蓮月の前半生は不遇の連続で、謂ゆる人の世の悲しみと無常とをしみじみ味いぬいたそれであつたが、後半生は歌人として歌三昧に世をおくり、又自ら手ひねりの焼物に日々を忘れ、明治八年十二月十日、西賀茂神光院の茶所で、その一生を終えたのである。

神光院年中行事

- 一、正月三ヶ日……………初詣り(厄除札授与)
- 一、一月廿一日……………初弘法大護摩法要
- 一、二月節分星祭……………厄除星祭祈禱(終日)
- 一、七月廿一日、土用丑日、…諸病封じきうり加持祈禱
- 一、毎月廿一日……………弘法大師縁日

平日でも諸病厄除の他、眼病祈禱、不思議大日色紙等は受付けています。

〈文 通〉

○市バス、京都駅から堀川線9号 快速9号
三条京阪から1号 37号(北大路駅経由)
(いずれも西賀茂車庫行き神光院前下車)



(蓮月尼舊栖之茶所)

不思議大日色紙について

この色紙は古来より神光院に伝えられる大日如来像で、諸種の願事が不思議にかなえられるところから、不思議大日として信じられています。

当院では特に受験、入社、商売繁昌、等々願事のある方におすゝめしています。ただその方のお部屋に飾っていただけで願事がかなえられる色紙です。遠くの方は申込んでいただければ御送り致します。

一体 三、〇〇〇円で、同封の上お申し込み下さい。

尚、願事がかないましたら、色紙は御返し下さい。